
とある世界でリトルバスターズ

ドラグーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界でリトルバスターズ

【Nコード】

N7355P

【作者名】

ドラグーン

【あらすじ】

目を覚ますとそこは真っ白な世界だった。

そこで理樹に突きつけられた衝撃の事実。

理樹とその仲間は今からどうなるのか。

とあるとリトバスが交差するとき、物語は始まる

ど素人が書く処女作。誤字脱字が多い駄文ですが、長い目で見てください。

主人公最強？小説です。

序章

目を覚ましたら、見たことのない場所にいた。
そこは白かった。どこまでも・・・。

「ここは？」

「起きたか」

恭介の声がする。

「ここはどこなの？」

「さあな。でも俺らが死んだことはわかるよな？」

・・・記憶をさかのぼる。確か、恭介のワゴンで移動している時に、
横から黒い車が突っ込んできたんだっけ。

「みんなは？」

「先に起きたやつがまだ寝てるやつを起こしてる」

「ふーん」

ふと、周りを見渡す。確かにみんな起こそうとしてる。・・・
なんだろう、あの人。

「みんな起きてきたな」

「ねえ恭介」

「なんだ？」

「そこで土下座してるのは誰？」

「は？」

なぜか土下座している人がいた。

『その人は誰』

一斉に聞かれた。

「「さあ・・・」」

とりあえず聞いてみよう。

「あの、あなたは誰ですか？」

すると立ち上がって、

「私は神です！」

『・・・・・・』

こう言った。

・・・みんなで、うわ何言ってるのこの人。みたいな目で見ると、

「嘘じゃないです！あなた達の事何でも知ってます！」

と言ってきた。

「ならここはどこですか？」

「ここは天国の手前です」

やっぱり・・・。

恭介たちのおかげで強くなったのに・・・こんなところで死んでしまうなんて・・・。

・・・そういえば、

「どうして僕らはここにいますか？」

そう、そこが気になるんだよね。死んでしまったなら、天国だか地獄だかに送ってしまえばいいんだし。

「それは・・・。あなた達が私のせいで死んだからです」

『はぁ！？』

「実は、運命回路に異常がありまして。修理しようとした時にはすでに遅く・・・。あなた達が死んだ後でして」

・・・なにそれ。

「そんなんで神が勤まるのか？」

「うっ」

恭介の毒舌。

「でも・・・」

「そんなことで俺らが死んでしまうなんてな」

「その・・・」

「で、俺らはこの後どうなるんだ？」

「え？」

「え？ じゃない。俺らはこの後どうなるんだ？ お前のせいで俺らは死んでしまった。それを伝えるためだけにここに呼んだわけじゃないだろう？」

そこは僕も気になる。

「それは、その。あなた達が取れる選択は二つです。このまま死んで、輪廻りんねてんせい転生の輪に入ること」

「ふーん、じゃあもうひとつは？」

「転生することです。」

え？ 転生？

「俺は転生を選ぶ。みんなは？」

「ぼくも転生を選ぶよ」

「りがそーゆーなら、あたしも行く」

「鈴ちゃんが行くならあたしも行こうかな」

「うむ。」

「みんなで行こうよー。」

「はいっ！私も皆さんと行きたいのです」

「・・・もちろんです。」

「当たり前だろっ。なあ謙吾さんよう」

「ああ」

「じゃ、決まりだね」

「わかりました」

「ところで俺らはどこへ転生するんだ？」

「えーと、とあるの世界へ転生してもらいます」

とあるの世界？ やっぱ異次元とかの世界？

「その世界は、超能力や、魔術がある世界です」

「わかった。ところでなんか能力もらえないか？」

「それはこの紙に書いてください」

そう言って神様は、紙とペンを取り出す。

「別に超能力以外でもOKですよ」

そういつて紙とペンを渡してくる。

能力かぁ……。何にしよう。……。じゃあこの間恭介の買ってきたマンガの技にしよう。

スクレボ以外で買ってくるのは珍しいからしっかり覚えてる。

そう思いながら書き終える。他にも色々追加してもらったし。

神様に紙を出すと、他のみんなはもう出し終わってた。……。なんか悔しい。

「ここで発表があります」

なんだろう。

「理樹さんは、ここにいる皆さんを助けるという、奇跡を起こしました。それを称えて」

『称えて?』

「リトルバスターズのメンバーの能力を使えるようになります」

「え?」

なんかすごいチート。

「理樹に遅れをとることになろうとは……」

「ずるい」

「理樹くんいいなあ」

「まあ、がんばれ」

「すごいねえ」

「すごいです!」

「・・・ずるいです」

「理樹はもう、俺たちの手の届かないところに行ってしまったのか・
・・・」

「泣くな真人・・・」

うん、最後の二人の言葉は聞かないことにした。

「では、お別れです。詳しいことは、手紙に書いておきます」

神様は手を叩く。すると・・・

パカッ

と足元から音がする。続いて体を襲う浮遊感。

・・・落とし穴!?

『うわあああああああああ!?!』

そしてそこで意識を失った。

序章（後書き）

誤字脱字、アドバイス等ありましたら、ご報告お願いします。
また、感想もお待ちしております。

とあるの世界

目を開ける。…青空が広がっていた。

……ここどこっ!? 体を起こす。座っているのはベンチ。見たことのない機械なんかも動き回っている。

…ここがとあるの世界?

周りを見渡してみるけど、みんなの姿は見えない。

詳しいことは手紙に書いてあるって言ってたっけ。ポケットを探る。
……あつた。早速読んでみる。

『この手紙を呼んでいるということは、無事に着いたんですね。よかったよかった。そこは、とあるの世界の学園都市です。見慣れないものがあっても動じないでください。あと、学園都市の人は、魔術ルトなんて信じないので、言うだけ無駄です。メンバーの能力は、以下のとおりです。

棗恭介

時を操る。時を止めたり、倍速で進めたり。自分の位置をさっきまでいた時間に戻すことで、自分の位置を変える事もできます。

棗鈴

光操作という能力。集めて切ったり反射させたり。焼く事もできます。光速で動く事さえ可能です。

三枝葉留佳

パイロキネシスト
発火能力者10万℃くらいは余裕です。一箇所にまとめれば、さらに上までいけます。

井ノ原真人

オートリバー
肉体再生の能力です。即死じゃなければ2秒で完治。更に、電撃や
炎などの耐性もついてます。言ってしまうえば体全体に、弱い幻想殺
イカ
しが掛かってます。

宮沢謙吾

マテリアルチェンジ
物質変化という能力で、そこにあるものを好きに変えることが可能
です。そして変えたものを自由に操れます。

来ヶ谷唯湖

メタルフオーゼ
肉体変化という能力です。体を自由に変えられます。手を剣にした
り、その気になればドラゴンになって火も吹くことができたりしま
す。

神北小毬

ムーブポイント
座標空間です。空間移動の強化版で、触れなくても出来る。

能美クドリヤフカ

ウィンドマスター
風使いで、風を操ります。カマイタチや砂嵐など、使い方は様々。
飛ぶことも出来る。

西園美魚

フリーズマスター
凍気操作という能力。基本的には氷使いと変わらないが、威力は段
違い。凍らせる物の幅が広がって、扱いやすくなっています。

直枝理樹

分かっていとは思いますが、一応。あなたの能力は、直死の魔眼
です。線を見て刃物でそれをなざると簡単に切れます。さらに死の
塊ぶつけることができます。……が、死の塊は、人によっては10
0分の1くらい手加減しても簡単に死んでしまう人もいるのでお勧

めはしません。

なお、メンバーの能力は、メンバーに効かない仕様になっています。魔術は見たものを使えるようになります。魔力は、見た魔術の使用量×見た回数×100倍です。

寮は、上条さんと同じです』

……なにこのチート。まあいいや。

「みんなを探さなきゃ」

そしてこの日。僕らは異世界にやってきた。

とあるの世界（後書き）

誤字脱字、見つけたのなら、お早めに。

銀行強盗

今、僕は歩いてる。よく分からない町を。
みんなはどこにいるんだろう。
なんて歩いていると、

「ここは、外？ 白井さん！ どうして私だけ！？ 白井さん！」

っていう謎の女の子が現れた。

僕はなぜかある知識（気づけば知ってた）を思い出す。．．．．．
確か強盗のやつだったけ？

「だれか！ 白井さんを助けてください！」

女の子は周りの人に助けを求める。でも周りの人達はそのまま通り過ぎていく。

．．．どうして無視するんだろう．．．。

まあ女の子の態度から見てかなり危険なの分かる。身に危険を感じれば、怖くなるに決まってる。

でも、僕達は強くなった。そう思って声をかける。

「どうしたの？」

「助けてください！ 白井さんが、白井さんが！」

「ちょっと待って。順を追って説明できる？」

女の子はうなずく。本当は知っている。でも知らない振りをする。

「銀行強盗が出たんです。それで私を助けるために・・・。」

「分かった。その白井って言う人は必ず助ける。だからちよつとここで待ってて。」

「はい・・・。」

そう言うってから、僕はシャッターが閉まってる銀行を見つめる。ポケットからナイフ（なぜか入ってた）を取り出す。能力を発動させ、線をなぞる。

ガラガラッ。

シャッターは崩れ、そこから入っていく。

「お前は誰だ！！！！」

「ただの通行人ですよ」

「ちっ、ふざけやがって！くらえ！！！！」

ちっこい球を投げってくる。でもスピードはない。

「遅いよ」

そういつて能力を発動させ、・・・斬る！

「なっ」

銀行強盗が驚く。その隙に近づき、腹を思いつきり殴る。

「ガハッ」

そのまま壁にぶつかり、銀行強盗は気絶した。

「おしまいっ」と

そのまま立ち去ろうとする。・・・でも、

「ありがとうございますの」

「どういたしまして」

この子が白井さんかな？

「助けていただいたことにはとても感謝しておりますの。・・・です。が。」

「ですが？」

・・・なんかいやな予感がする。

ガシヤッ。

・・・ガシヤッ？

「ちよつとご同行お願いしますの」

ええええええ————。

何この展開・・・。まさかこんな事になるなんて・・・。

だからといって能力使って逃げるのも気がひける。
そこで仕方なくおとなしくする事に決めたのだった。
他のみんなはどこにいるんだろう・・・・・・。
そんなことを思うのだった。

銀行強盗（後書き）

作者はアニメしか知りません。

風紀委員

ここは風紀委員^{ジャツシメント}の支部。

銀行強盗を解決したのに・・・何で僕は連れてこられたんだろう。前には僕を連れてきた女の子。

「ねえ」

「何ですか？」

「何で僕は連れてこられたの？」

そういうと、その子は少し悩みながら、

「あなたの名前と能力を教えてくださいな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それだけ！？ たったそれだけ！？

「名前は直枝理樹」

「能力は何ですか？」

なんて答えればいいんだろう。直死の魔眼って言えばいいのかな。でも手紙には死の塊を作れるとか書かれてたし。うーん。

「答えないつもりですか？」

「あ、そうじゃなくて、原石だからなんて言えばいいのか分かんなくて」

「そうですの？」

死を操るから………。

「デスマスター死操作？」

・・・ネーミングセンスがなあ。

「どういう意味ですの？」

さっきから思ってたけど変なしゃべり方だなあ。

「死を操るんだよ」

「聞いたことはありませんわ。嘘をついてるんですの？」

「嘘じゃないよ。じゃあ、なんか壊れてもいい物貸して」

そういえばさっきの子はどうしたんだろう。

「これでいいんですの？」

ボールペンね……。それを持って死の塊を作るように集中する。
黒い何かがボールペンを覆う。

「!!!!」

するとあつという間にボールペンは消えていた。

「これが僕の力」

「凄いですわね」

「他に用件は？無いなら帰りたいんだけど」

「では最後の用件は、・・・あなた、ジャッジメント風紀委員に入りませんか？」

ジャツジメント

「
・
・
・
・
・
・
はい？
」

「だから風紀委員に入りませんか？　と言ってるんですの」

「・・・丁重にお断りします」

「あら？ いいんですの？ もしお断りした場合は・・・」

「場合は？」

なんだろう、いやな予感がする。

「あなたがシャツターを壊したことについて警備員に通報しますわ
アンチスキル

アンチスキル

鬼! ? 助けてあげたのにそれ! ? しかも♪! ? ♪つける! ?

「さあさ、どういたしますの?」

「・・・入るけどいくつか条件があるよ?」

「なんですの?」

「一つ、僕のほかに何人か友達がいるんだけど、もしみんなも入ると言ったら、無条件で入れること」

「はいはい」

「二つ、友達と自由に遊ばせてほしい。三つ、これは友達が入るっていった場合の話でもあるんだけど、それぞれにあった仕事をさせること。これを守ってくれるなら風紀委員になってもいいよ」

「分かりました。先輩に頼んで研修も無しにしてもらいますからご安心してください」

「ありがとう。じゃあ、僕はこれで」

「はい・・・あら?」

「どうしたの?」

「なんか人だかりが・・・」

そういえばなんか騒がしいような・・・。
窓から外を見ると、

「真人!？」

そこには幼馴染の真人が喧嘩していた・・・。

風紀委員（後書き）

ヒロイン決まらん。なのでアンケートをとりたいと思います。

理×佳

理×鈴

理×佐

理×初

理×黒

その他

これから選んでください。

居るはずのない人物

かんかんかんかん・・・。

急いで階段を下りていく。

「真人！」

「うおらあ！！！！」

返事がない。喧嘩してて聞いてないのかな。でも・・・手にペットボトルを持ってるってことは、バトルをやってる。つまり近くに恭介がいると思うんだけど・・・。

人ごみの中を掻き分けていく。・・・居た！

「恭介！！」

「おう、理樹じゃないか。探してたんだぞ」

「真人は誰と喧嘩してるの！？後、どうして僕を探しててバトルになるのさ！？」

「真人と謙吾がお前を探しててな、そのことで真人が無能、なら謙吾だって無能だ。なんだとう・・・みたいな展開に」

ありえる・・・。

「ならどうして止めなかったのさ！？」

「そっちのほうが面白そうだろう？」

ワァァァァ!!!!!!

野次馬が騒ぐ。

「お、試合も終わったみたいだな」

真人のほうを見る。勝ったのは・・・真人だった。

「・・・真人が勝った」

「へえ、珍しいな」

「恭介、二人の武器は？」

「真人は空のペットボトル。謙吾は・・・長さ5cmの割り箸」

「そりゃ勝てないでしょ」

むしろ勝てたら凄い。

シュツ。

後ろから変な音が聞こえた。後ろを振り向くと、

「あ、理樹君だ、こんにちは」

「ん？ りきじゃないか。・・・というかここどこだ？ あ、馬鹿兄貴」

「うむ、少年と恭介氏だな。早速だが恭介氏。ここに呼んだのはなぜだ？」

小毬さんと鈴、来ヶ谷さんがいた。

・・・小毬さんの能力は座標空間ムーヴポイントだったつけ。

「こんにちは」

「よう」

「あ、理樹くんだ、おーい」

今度は右のほうから葉留佳さんの声。

今度はそっちのほうに目を向けると、葉留佳さん、西園さん、そして、ここに居るはずのない人物。

・・・美鳥と佳奈多さんが居た。

「どうして此処に!？」

「どうして此処について言われても・・・」

「呼ばれたから、としか言いようがないんだけど？」

美鳥と佳奈多さんが言う。

「美鳥は実際には居ないはずだし、佳奈多さんは事故にあってないはず」

「ああ、そのことですか。まだ私達も聞いていないのでなぜ居るのかは知りませんが、ここに居るのは確かです」

「そうそう。ところで理樹くん」

居るはずのない人物（後書き）

変なところがあったら教えてください。アンケートはまだ続きます。

半年と経過と戦闘だ

さて、あれから半年経った。いろいろあったよ。メンバーが増えたしね。

僕らの10人と、佳奈多さん、笹瀬川さん、美鳥、綾、・・・死んだはずの古式さん。

そして、僕らと同じ『転生者』の四人。

付喪神さん。

由愛羽渥無さん。

気味和涙さん。

水神溺さん。

多すぎない？聞いた話じゃ友達同士で部屋の中に居たらトラックが突っ込んできたとか。・

・・・五階って言ってたよね・・・。

四人の関係。

付×気

由×水

といった感じ。

あの後風紀委員で大変だったけど・・・。

話しをしたら、メンバー（神さんたち含む）がみんな入るとかい始めたし・・・。

そんなに入らないって思ったけど認められておどろいたよ。

だって19人だよ！？よく認めてくれたよね・・・。

・・・最近知ったんだけど、僕の能力、メンバーの人のを使えるって成ってたけど・・・。

まさか後に入った人の能力も使えるとは・・・。

この世界のこと話合った。なぜかあった知識は、この世界はどうやら、漫画やアニメの世界らしい、という事。僕たちの知識は、全員合わせても前半部分だけらしいこと。

いまだによく分からない。みんなが同じ高校じゃない事。神さん四人は、長点機学園とかいうところに居るらしいね。

・・・ていうか、最近一方通行さんと仲がよくなってる。溺さんは言ったよ。どんだけご都合主義？って。まだリトルバスターズには入ってないけど・・・。まあ今誘えば入ってくれそうかなー。なんて半分現実逃避している僕は・・・・・・・・・・。

「避けるなっ！」

「無茶言わないでよっ!？」

現在御坂さんに攻撃されてます。

どうしてこうなったんだろう。

帰り際、不良に囲まれている人を見つけたら、・・・助けるよね、人として。

その助けたときには当麻と一緒にだったのに・・・。僕を囚にして逃げちゃったよ。

まあとんでくる電撃の線を、ナイフでなぞるだけなんだけんど・・・、結構早い。

「埒が明かないわね。だったらこれはどうっ!？」

御坂さんの手に黒いものが集まる。

「砂鉄？」

「ええそうよ、高速で振動してるから、当たったらちよっと血が出るかもね」

「絶対それだけじゃすまないよね!？」

笹瀬川さんの能力が発電能力だし、特典で武器関連の使い方は一番

って事になってるはずだから、同じのを出せば勝てると思うけど、
デュアルスキル
多重能力者ということはしばらく隠しておきたい。

「ならこっちも」

「?」

同じように、死を手に集め、剣の形にする。

「これは死、そのもの。当たったら危険だから当たらないように、
気をつけてね!」

そう言って駆け出す。

シュツ。

御坂さんが砂鉄の剣を振り下ろしてくる。
それを横によけ、右から一閃を繰り出す。

ブーン。

もちろん当たらないように調節したよ?

「くッ」

御坂さんが、一気に距離をとる。

「仕方がないわね。これを使う気はなかったんだけど・・・」

そう言って、コインを取り出す。・・・ってまさか。

「超電^{レールガン}磁砲使う気!?!」

「そうよ」

「僕を殺す気!?!」

「大丈夫、あんた死にそうにないし」

無理だからね!?!?かと思っただけもう発射準備してるし。

「……っ」

速攻で死を周囲に展開させる。

ズガアアーン……。

でっかい音が聞こえる。

……そろそろいいかな。

そこで死を展開させるのをやめる。

「なっ!」

御坂さんが驚く。まあ一番の威力がある技を防がれたんだから当たり前かな?

「まだやるの?」

「……………電池切れ。また今度ね」

よかったよかった。・・・あれ？

「また今度？」

「そうよ？私が勝つまで続けるから」

「ええええー」

とりあえず御坂さんは帰っていった。

・・・さて、神さんたちは次の身体測定が超電磁砲の始まりって言うたっけ。

次は・・・三日後か。

「なんか憂鬱だな。帰ろう」

携帯で、同室の真人（この縁は転生しても続くの？と思った。）に今から帰ると連絡を入れ、周りに誰も居ないのを確認して、座標空間で帰った。

明日は風紀委員の当番か・・・がんばろうかな。

そういえば、風紀委員の公務執行妨害って言えば戦いつて避けられ
たんじゃ・・・。

過ぎたことを考えるのはやめよう。
そう思ってたつと寝ることにした。

半年と経過と戦闘だ（後書き）

戦い書くのはつらいです。

これからがんばっていききたいです。

佐天涙子

今日はパトロールの日。隣には、鈴と笹瀬川さん。

何か、威嚇しあってるけど……。気にしない。というか今気付いたけど、白井さんと笹瀬川さんって同じ口調だね。

……。ん？今なんか女の子が怪しい人と一緒に路地裏に入って行ったような。

気になるし、ちょっと行ってみよう。

僕はさっき女の子が入っていった路地裏に向かった。

佐天視点

今日の私は付いてない。

初春は風紀委員の仕事で居ないし、不良の人とぶつかって路地裏に連れ込まれてしまった。

「あの……。帰りたいんですけど……」

「ああ？帰してやるよ。ただし、俺達の用が済んだらなあ、ギャツハツハツハ」

怖い。帰りたい。きっと無理だ。帰してくれる気がないのは目に見えてるし、誰も助けに来てくれない。

「風紀委員です。その女の子を解放すれば手は出しません。その女の子を解放してください」

助かった。そう思う事ができた。

理樹視点

路地裏を覗くと、女の子が怖がっているのが見えた。

「風紀委員です。その女の子を解放すれば手は出しません。その女の子を解放してください」

まずそう言った。

「風紀委員！？・・・なんだ、まだ新米みてえじゃないか。邪魔すんじゃないよ！！」

やっぱり・・・って何人かバット持ってるけど、どっから持ってきたの！？

まあいいや。

ナイフを抜きながらこう言う。

「交渉決裂だね」

いきなり一人殴りかかってくる（素手）それを避け、顎を殴り飛ばす。

「ぐはっ」

その後二人がバットで殴りに来る。能力を使い、ナイフでバット切る。

「「なに！？」」

驚いてる間に回し蹴りを放った。

「「ぐえっ」」

二人とも吹っ飛ばす。

「食らいやがれっ」

不良の一人が炎を飛ばしてくる。・・・能力使えるならなんで不良^{スキル}集団に入ってるんだか。
死を展開させ、それを防ぎ、一気に距離をつめ、蹴りを入れる。

「ごはっ！」

なんか他の人は逃げたみたい。

「大丈夫ですか？」

「あ、はっはい！」

「そう良かった」

そう言って警備員に連絡を入れる。10分もすれば迎えに来てくれるかな。

「あ、あの」

「ん？なに？」

「バットをバラバラにしましたが・・・」

「あれは僕的能力。死の線を切ったんだよ」

ってよく見れば初春さんと一緒に居た人じゃん。

「って事は・・・あなたが直枝さんですか？」

え？

「何で名前知ってるの？」

「初春がよく話してくれるんです」

人の個人情報勝手に教えないでほしいんだけど。

「そうだよ。僕が直枝理樹」

「嬉しいです。レベル5と知り合いになれるなんて」

・・・それを言わないでほしいなあ。

僕らはみんなレベル4になるように調節してるんだけど、僕的能力は測りづらいから常盤台で測ってるんだ。けど、緊張して操作をミスってレベル5になっちゃったんだよね。（ちなみにレベル5の威力が出せるのは特典のおかげ）

それのおかげで美琴さんに狙われやすくなったし。序列は2位だつて・・・。

「理樹!!」

「直枝さん!？」

「じゃあね」

「はい！」

そこで別れた。

帰ってから勝手にどっか行くなって怒られたよ。
気付かないほうもどうかと思うけどね。

佐天涙子（後書き）

アニメ版以外は出てこないの、それが嫌な方はこのあたりでやめてください。

身体測定

さて、神さんたちが言うには今日が超電磁砲の始まりらしい。

「何もなければいいんだけど・・・」

そういう僕は身体測定の為に常盤台へ向かっている。

身体測定の度に常盤台へ行かなきゃならないって言うのはちょっと辛い。

数十分後。

着いた。

さて、このあたりに案内してくれる人が来てくれるはずなんだけど。

「いないなあ」

まあ何度も来てるし何とかなるかな。

とりあえずもう少し待とうかな。

十分後。

「お待たせしましたの・・・ってあら？」

「迎えに来てくれるのって白井さんなんだ」

「ええ。・・・というか年上なんですからその敬語はやめてくれませんか？」

「ごめん、癖みたいなので」

「まあいいですわ。着いて来て下さい」

そのまま白井さんの後を着いていった。

数分後

「ここですよ」

「ありがとう（ニコッ）」

「いえ／＼／＼」

なんか顔が赤いけどどうしたんだろう。

ズガアアアーーーーン

「うわっ!?!」

「驚きました？今のが美琴お姉さまの超電磁砲ですわ」

「へえー。あの時はそんなに強そうじゃなかったけど、手加減してたのかな・・・」

そう思いながらプールへ上がっていく。

「あ、あんた!どうして此処に居んのよ!」

「身体測定に来ただけど」

そういつて台にあがる。

『直枝さんですね?』

「はい」

『では、反対側にある鉄の塊に能力を放ってください』

そう言われ、演算を開始する。

死を意識し、手を突き出す。そこに死をため・・・放つ!

ピシューーーー

ちよつと気の抜ける音と共に黒い死が飛んでいく。

鉄の塊をやすやす貫通させる。

なんかあっちで話し合ってる。

『総合評価レベル5』

それを聞いた後に僕はゆっくり台から降り、校門へ向かった。

「ちよつと待ちなさい!」

・・・訂正。向かおうとした。

「なに?」

「あんたレベル5だったの!?」

「そうだよ。僕は直枝理樹」

「直枝理樹って第二位！」

「そう、じゃあ友達待たせてるから」

そういつて校門を出る。歩きながら話してたからあっという間。

「ちょっと！」

呼び止める声。

「友達待たせてるから早くしてほしいんだけど」

「勝負よ！」

「人の話し聞いてた！？友達待たせてるんだけど！？」

「じゃあ今度勝負よ」

「分かった。じゃあね」

急いで待ち合わせの場所に向かう。

怒るだろうなあ、こんなところで能力使うわけにも行かないし。

やっぱり怒られた。

とかかこの間気付いたんだけど、僕の場合は事象そのものを殺すことができるらしい。

・ ・ ・ 足の速さの限界を殺せばぎりぎり間に合ったような。
・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 気にしないようにしよう。

そうして僕は、身体測定を終えた。

身体測定（後書き）

理樹の口調が少し難しいです。

オリキャラ設定など

付喪神 （つくも しん）

性格は楽天的。楽しいことが大好きで、明るい涙が好きで、付き合っている。

思ったことは結構ズバツというタイプ。

口調は恭介に似てるが、声はブリーチの一護の予定。

サイコキネシスト
念動能力者で、何でも持ち上げられるほどの能力。

物を飛ばせば時速10から5000km出せる。

気味和涙 （きみわ るい）

明るく何でも楽しくやろうとする。口調は佐天十初春÷2の予定。
名前のせいで虐められたのを、神に守ってもらってから好きになっ
て付き合い始める。

マリオネット
擬似人形という能力で、体の一部（能力からも可）から本人そっくりの
人形を作り出す。

本人の能力も使え、能力は、レベル5並に使える。

人形に痛みなどがあったら、本人にその痛みが通じてしまう。

100人まで出すことが出来、皮膚に（グローブごしなど、服の上
ならセーフ）触ると元に戻る。

だが集中して演算すれば、2，3体しか作れなくなるが、痛みはほとん
ど通じず、触っても消えなくなる。メンバーのなかで数少ない
真正証明のレベル4。

由愛羽渥無 （ゆめは あくむ）

なかなか綺麗で、可愛い物が好きだったりと性格もよく、優しい。

口調はTOAのティア・・・予定。

溺に告白され、悩んだ後、溺に命を救われ、好きになり、付き合い
始める。

精神操作系で、感情を読んだり操ったり出来る。

レベル4なら演算さえ操ることが出来る。レベル5は軌道をそらす程度しか出来ない。

水神溺 （みずかみ でき）

人を護るのが当たり前だと思っている。正義感が強い。口調はうえきの法則の植木の予定。

渥無に一目惚れして、告白した後、命を救うことによって付き合うことができてうれしく思っている。

意外ともてるのだが、渥無以外の好意には気付かない。

水流操作の能力で、生成することも可能。

リトルバスターズ的能力。

棗恭介

時を操る。

棗鈴

光を操る。

井ノ原真人

肉体再生。馬鹿な彼がこれを使えるのは体のことだけは詳しいからだからだろう。

宮沢謙吾

マテリアルチェンジ
物質変化。そこにあるものを自由に変えられる。

三枝葉留佳

パイロキネシスト
発火能力者。最大で50万度まで変えることが出来、その温度まで耐えられる。

能力のせいかな、暖かいところが好き。

二木佳奈多

グラビティマスター

重力操作重力の重さを変えたり、重力の球をぶつけたりと応用性がある。

綾と佐々美と一緒に、事故の時倒れた車に巻き込まれ、数時間後理樹達の後を追った。

朱鷺戸綾

大地と血を操る。本来は血だけだったのだが、神が不便だと思い、大地を操る能力つももらった。

笹瀬川佐々美

エレクトロマスター

発電能力者。本気は美琴に少し勝る。

古式美雪

確率変動という能力で、0じゃなければ何でも出来る。デュアルスキル多重能力に

もなれる。

だが、演算が非常に辛いので、一日十回しか使えない。死んだ後、気が付けばこの能力をもらいながら、とあるの世界にいた。数少ないレベル4の一人

能美クドリヤフカ

風使いでかまいたちは余裕。

神北小毬

座標空間。空間移動の強化系。

西園美魚

凍気操作。かなり危険。血液も凍らせられる。

西園美鳥

シャドーマスター

影使い。影を縫いとめることも出来る。影から闇の魔物を生み出すことも出来る。

他のメンバー達がとあるの世界に行ってしまったから、ついで、ということでした。

来ヶ谷唯湖

肉体変化で、完全変化と呼ばれ、性別や声さえ変えられる。

直枝理樹

今まで紹介した能力＋死を操る能力。更に、演算能力もプラスされるため、確率変動も100回は使える。

これで一方通行の演算も入った・・・。200は使えるかも。

こんな感じです。

オリキャラ設定など（後書き）

ネタが無くなってきた。苦し紛れのむちゃくちやになるかも。

始まり

今僕らは歩いている。

向かう先は・・・クレープ屋。

最初は何で？と考えただけど、そこが始まりらしい。

・・・・・・ということは、御坂さんと会ったよね？

次あったら勝負する、見たいなと言わなかったっけ？

「ここだここだ」

なんて考えてるうちに着いたらしい。

御坂さんは居ないかどうか辺りを見回す。

「どうしたんだ？りき」

不意に鈴と目が合った。

「なんでもないよ」

「りき、今のお前はおかしい。挙動不審だ」

「ちょっとね」

「話せないのか？」

「・・・御坂さんって知ってる？」

知ってるよね？たまに支部にも顔出してるし。

「みさか・・・ああ、くろこが言ってたお姉さまか。うん、知ってるぞ」

「喧嘩吹っかけられてさ。次会ったら勝負、みたいなこと言われちゃったから」

「・・・まあがんばれ」

「そうさせてもらうよ」

「おい！理樹！遅いぞ！」

遠くから真人の声が聞こえる。

「行こうか、鈴」

ちりん

鈴の音がする。

真人たちのほうへ向かう。

「どうしたんだ？」

神さんが訊ねてくる。

なんでもないよ、と返し、これからどうするの？と訊ねる

「そうだな。・・・この中でクレープが欲しい奴いるか？」

と、神さんが言うと、何人かが手を上げる。

「よし、理樹、適当に買って来い」

「何で僕!？」

「いいから買いに逝って来い」

「なんか言葉が違うような気がするんだけど!？」

「いいから」

まあ四人だったからなんとかなるけど。

「分かったよ。でも、適当に選ぶから、気に入らなくても文句言わないように言っというてよ？」

そう言ってクレープ屋の列に並びに行く。

「あ、あんた!」

見つけた。気にしない気にしない。

「無視すんなごらあああ!!!!!!!!!!!!!!!」

バチバチバチ

とっさに死を展開させ、飛ばしてきた電撃を防ぐ。

「あぶなっ!?! 御坂さん、危ないよ!?!」

「あんたが無視するからよ」

「周りの被害を気にしないと……。後ろの人が驚いてるよ？」

御坂さんの後ろには初春さんと佐天さんが居た。

「あ、久しぶりです、直枝さん」

「久しぶり。で、君の名前は？」

「そういえば言ってませんでしたね。佐天です、佐天涙子」

「佐天さんはどうしてここに居るの？」

「初春と白井さんと御坂さんと私でクレープを買いにきたんです」

「そうよ。そこであんたが見えたから声をかけたの」

「そうなんだ。あれ、白井さんは？姿が見えないけど」

「席を取りに行ってるのよ」

「へえ……」

そう喋りながら列に並ぶ。しばらく雑談する。

「次のお客さま」

「あ、僕だ」

雑談をやめ、注文をする。

どれにすればいいかな。・・・みんな同じにするとして・・・。

「チョコとバニラを四つ下さい」

「かしこまりました」

店員さんは、そう言って奥に引っ込む。

「あんた結構食べるのね」

「そんなに食べられるんですか？」

「これは僕の分じゃないよ？」

「「えっ？ぱしりなんですか？（なの？）」「」」

「違うよ！これは友達の間」

と言っていると、

「お待たせしました。チョコとバニラを四つです。あと、最後のストラップです」

と言われ、クレープと一緒にかえるのストラップをもらった。

がた

後ろから音が聞こえたから振り向くと、

「御坂さん？」

御坂さんがOTZの体勢をしていた。
もしかして……。

ストラップを御坂さんの前で揺らす。

御坂さんはじいじいとそれを見てる。

「欲しい？」

「(こっくり)」

御坂さんは頷く。

「じゃああげるよ。僕は要らないし」

「ほんと!？」

「うん、はい」

御坂さんにストラップを渡す。

「ありがとう」

「じゃ、僕は行くから」

そう言ってみんなの元へ向かう。

「お待たせ」

鈴と笹瀬川さん、涙さんと、小毬さんだ。

「ん、」

「どうもですわ」

「ありがとうございます」

「理樹くんありがとう」

みんなはゆっくり食べ始める。

「おや？理樹さん達じゃありませんの？」

「あ、白井さん」

そこには白井さんたちが居た。

「くろちゃん、一緒にどうですか」

「一緒に一緒にさせていただきますが……。その呼び方はやめてもらえませんか？」

「えーどうして？」

「どうしてって。・・・まあいいですわ。お姉さま、こっちで食べましょう」

そうして御坂さんたちを交えて雑談を始める。

「・・・・・・・・あれ？」

「初春さん、どうしたの？」

「どうして昼からシャッターを閉めてるんでしょう」

刹那

ドガアアアン

でかい音と共に、シャッターが爆ぜた。

始まり（後書き）

理樹のキャラが変わってきました。オリキャラの名前はその場で考えました。

完結までにどれくらいかかるかは分かりませんが、長い目で見てください。

二回目の銀行強盗

その音が聞こえた後、僕はすぐに指示を出す。

「真人と謙吾と恭介、それと神さんと溺さんは僕と一緒に犯人を捕らえて！残りのみんなはもしものときの為に待機して！」

そう言って駆け出す。見れば白井さんも御坂さんを止めて、犯人逮捕に向かっていた。

『風紀委員です（ですの）（だ！）おとなしくして下さい（な）（しろ！）』

「何！・・・ってそんなに強そうじゃないな。風紀委員も人手不足かあ？」

「「「ぎゃっはっは」」」

うわー、下品な笑いだね。

そのまま白井さんに向かっていく。

「ほーらお嬢ちゃん、どかないと、怪我しちゃうぜ！」

「「「あいつ、馬鹿だろ」」」

うん、そう思う。でも、真人に言われるのは違和感を感じる。

「そういう三下の台詞は————」

白井さんが強盗の体勢を崩して倒す。そのまま気絶する。

「――死亡フラグですわよ？」

一人撃沈。

「ちっ！これを見ろ！」

ボォワァ

強盗の一人が炎を出す。

「何考えてんだ？」

「情けないなあ」

「お前あほか？」

「まったく」

「計画性もねえしな」

「それを出すなら、もうちょっと後に出すべきだと思っただけど」

「ほんとですわね」

誰がどの台詞を言ったかは考えてください。

「おい！ちよっとは驚けよ！レベル3の能力だぞ！」

「だから、その能力を出すならもう少し後に出すべきだと言って
るんだよ」

「くっ、くらえっ!!」

強盗はその炎を真人にぶつけようと放つ。・・・まあ見た目だけなら1番強そうだけど、通用しないのくらい分かりそうなものだよね。

「筋肉!」

とても真人らしい言葉を言いながら飛んでくる炎を殴りつける。

ばーん

すると炎は霧散する。・・・まあ弱いとはいえ、イマジンプレイカー幻想殺しがかか
ってるし。

「なに!?!」

「「「ふんっ」」」

神さんが驚いている強盗に足払いをかけ、溺さんが蹴り上げ、恭介
がそれを踏む。

・・・って容赦ないなあ。

しゅしゅしゅしゅ

更に白井さんが空間移動で鉄の棒を強盗の服に縫い付け、謙吾が剣
を作り出し、強盗の喉元にあてる。

「これで終わりだ」

「これ以上抵抗なさるようなら直接体内に移動させますわよ？」

うん、白井さんが怖い。・・・というか僕さつきから何もしてないね。

「だめえっ！！！」

その時、佐天さんの声が背後から聞こえた。

鈴視点 時を遡ること数分前

「真人と謙吾と恭介、それと神さんと溺さんは僕と一緒に犯人を捕らえて！残りのみんなはもしものときの為に待機して！」

りががそう言った。

まったく・・・なぜあたしを呼ばないんだ。まあもしも、といった時は大体なんか起きるからな・・・。

「黒子！」

「いけませんわお姉さま。これは風紀委員の仕事。一般人を巻き込むわけには行きませんわ」

おおー。くろこが初めて（そうでもないか？）それらしいことを言ってるな。

くろこがぱつと強盗の一人を倒してしまった。いつものあほさはまったく見られない。

「今広場から出たらだめです！」

「でも！」

騒がしいな。

「どうしたんだ？」

「子供が一人足りないんです！」

なに、一大事じゃないか？

「みなさん、一緒に探してあげましょう」

うわっ怖っ。いつの間にみおは後ろに居たんだ？

「そうね」

「そうだね、こここそはるチンの出番ですナ」

「うんうん、お姉ちゃんの言うとおり」

「そうですね」

「がんばりましょう」

「子供よね、すぐ見つかるといいんだけど」

「うむ」

「心配だねえ」

「そうね、葉留佳がいくのなら私も行くわ」

「そうですわね」

「えーと、早く探したほうがいいんじゃないんでしょうか」

その後、あたし達リトルバスターズと、るいこ（理樹以外は名前を知っています。作者）とみこととかざりで、手分けして探すことになった。

「いないなあ」

まったく、どこに居るんだ？

「だめえ！」

さてんの声が聞こえた。

振り向くと、強盜が連れて行こうとしてるっぽい子供にしがみついてるのが見えた。

「くそつ、離せよつ」

その強盗はさてんの顔を蹴ろうとした。

「何しとんじやあー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

バキボキグギイ！！！！！！

あたしは能力全開で、思いつき蹴り飛ばしてやった。やばい音が

聞こえた？ 知るか。まあ全力でやると光の速さらしいからな。

「大丈夫か？」

「はい、ありがとうございます」

うん、さてんが元気そうでよかった。

後はりき達に任せよう。

理樹視点

うわぁ、鈴容赦ないなあ。僕は鈴にやられた強盗を哀れに思っていた。

僕も一度あれ食らったよ。肉体再生で変なふうに骨が治っちゃったから辛かったよ。

「くっくそ・・・」

あれで動くとかすごいね。

「黒子！！これは個人的な問題だから、手え出させてもらおうよ」

「え？」

「私の友達に、何手を出そうとしてんのよ！！」

「それじゃあ僕も。ちようど戻ってきたしね」

「なんであんたも？」

なんでって・・・。

「それはいくら防がれたからって女の子の顔を蹴ろうとしてる人を見逃すほど、僕達は甘くないからね」
リトルバスターズ

「そう、じゃ、手伝ってもらおうよ!」

「うん」

その時後ろから声が聞こえた。

「お、思い出した! 風紀委員には、捕まったら最後、身も心もずたずたにする空間移動者が居るって」
テレポーター

「それ、誰のことですか?」

白井さんのことですよ、と思いながら手に死を溜めていく。

「それだけじゃねえ! さらに常盤台の超電磁砲! レールガンそして、物、生き物を問わずなんでも殺すレベル5・・・」

「そう、あれが常盤台のレベル5、そして唯一のレベル5の風紀委員————」

車が僕らをひき殺さんと、迫ってくる。

御坂さんはもう構えに入っている。

ズドオオオoooooooooooo
バシユッ

黄色い光線と黒の光線が一直線に車に向かい、激突した。

ドカアアーン

車は回転しながら後ろのほうへ飛んでいった。

「御坂美琴お姉さまと、デスマスター死操作の、直枝理樹さんですわ」

こうして、二回目の銀行強盗事件は終わった。

「は、早くしてください」

すごい弱気な警備員。それでいいの？とも思う。

「さて、みんな、帰ろうか」

『はい（うむ）（ああ）（ええ）』

そうして僕らは帰っていった。後を全部白井さん達に任せて・・・。

後日、なぜか僕だけがいつもの倍、仕事をやらされた。なんで僕だけが・・。

二回目の銀行強盗（後書き）

理樹が半分オリキャラ化してる。
さて、次はバトルを書こうかな。

狙われた常磐台

今、僕達は、白井さんと御坂さんに誘われ、初春さんと佐天さんと小毬さんと鈴と葉留佳さんと佳奈多さんと僕で、常磐台中学に向かっている。

初春さんは佐天さんになんか熱心に語ってる。

佳奈多さんと葉留佳さんも。鈴と小毬さんはお菓子を食べてる。・

・平和だね。

「次は〓学舎の園〓」

「あ、ここですね」

初春さんが止まる、のボタンを押す。

数分後

「うわ〓降ってるねえ」

「大丈夫ですよ。3，2，1」

初春さんがカウントダウンをすると空はからっと晴れた。

「この予報はいつも当たるのね」

「たまには外れれば面白いのになあ」

「う〓ん、雨の日だけ外れてくれればねえ」

「とりあえず行かない？」

「うん、そうだな」

僕らは白井さん達との待ち合わせ場所に向かった。

~~~~~

「お待たせ」

「はいですの。……って佐天さん？ どうして水びたしなんですの？」

「あ、あはは」

「え」と

「なんて言えばいいんでしょうかね」

「私に聞かないでよ」

「黒ちゃん、実は……」

「るいこは水溜りですっ転んだ」

「そうなの？ じゃ、着替える？」

『え？』

~~~~~

「いやゝ恥ずかしいですね」

佐天さんが常磐台の制服を着て来た。

「いや、似合ってると思うよ?」

「え、そうですか? (／／／／)」

「うんうん」

・・・なんか、後ろから殺気を感じる。・・・気のせいだよね。

「そうですね、なかなか似合ってると思いますヨ」

「・・・そう? 葉留佳のほうが・・・」

最近佳奈多さんがよく分からなくなった。

「そうだねゝ、似合ってるよ、ゆー」

「・・・そうだな」

鈴はなんか不機嫌だな。どうしたんだろ。

「さて、ゆっくりお話でもしましょうか」

「あ、私ちよっとお手洗いに行ってきます」

佐天さんがお手洗いに向かう。

数分後

「遅いわね」

「遅いのです」

「ちょっと様子見てきます」

初春さんが佐天さんの様子を見に行った。

数分後

「御坂さん、ちょっと来てください!」

「どうしたのかしら」

御坂さんが初春さんの方へ向かう。

数十分後

僕らは常磐台の中の風紀委員の支部に居た。

なんで此処にいるのか。佐天さんが最近発生している常磐台狩りに巻き込まれたらしい。

それで佐天さんが太眉毛を書かれて怒り、捕まえられたらケーキを好きなだけ奢るといふ約束をして、此処に来た。

初春さんがここの監視カメラにハッキングしている。

いや、さすが守護神^{ゴールキーパー}って呼ばれてるだけあってハッキングも得意?

「よし、出ました」

「たくさんでたわね」

「佐天さん、約束ですよ？」

「2個でも3個でも食ってよし！」

「わーい！」

「多すぎますわね」

『うん、（ええ）』

「え？ ケーキの量がですか？」

「そっちじゃないよ。初春さん、人があまりいない所と、居過ぎるところを削除して」

「え？ は、はい」

次々と映像が消されていく。

「・・・・・・居た」

~~~~~

「そこを左です」

今、常磐台狩りの犯人を追っている。足音で追いかけるのは辛い、

だから初春さんがこっちに指示を送り、それにあわせて動く。いや、監視カメラに映ってくれててよかった。

「次、右です」

よし、この先には御坂さんがいる。後はしばらく様子見、かな。

数分後

結果を言えば犯人は捕まり、無事護送された。  
なんか記録のレベルと実際のレベルが合わないとか言ってたけど。  
気にしないことにした。

後日太眉毛が消えないので油性ペンを消せないかといわれて消した。  
やっぱり応用性が高いね、この能力。

## 狙われた常磐台（後書き）

ド「さあ始まった、ドラグリーンと」

理「直枝理樹の」

『会話コーナー』

ド「さて、理樹早速だが」

理「はい」

ド「・・・何を話せばいいんだろう」

理（ずでん）

ド「どうしたんだ？ そんなにずっとこけて」

理「なんでそういうのを考えずにこのコーナー書き始めたんですか？」

ド「いや、他の人がやってたから始めたんだけど、どうすればいいのかわかんなく　て」

理「ええええー」

ド「・・・次回予告でもする？」

理「まあ、思いつくまではそれで良いんでしょうけど・・・。ところで」

ド「なに？」

理「なんか僕の性格おかしくありません？」

ド「ああそれ指摘されたんだけど、今までの性格じゃ原作に介入できないかなあ　と」

理「あ、そう。では次回は」

ド「脱ぎ女、ちなみに実際にこの題名になるかは分かりません」

理「ええええー」

脱ぎ女ともいえるが、決闘ともいえる（前書き）

やつと書けた・・・。



## 脱ぎ女ともいえるが、決闘ともいえる

今、僕は鈴と真人と一緒に町を歩いている。すると、

「あ、あんた」

御坂さんと出会った。勝負を迫られたけど、上手くかわして、雑談しながらのんびり歩いた。

「お、理樹と鈴と真人とビリビリじゃねえか」

当麻と会った。

「ビリビリって言うなあ!!!!!!」

いつものようなやり取り。いつもならここで当麻だけがリアル鬼ごっこする事になるんだけど、

「そうだおまえら、ちょっとこの人助けてやってくんねえか？ちょっと俺、用事があるんだ。ビリビリ以外は風紀委員だろ？じゃ、よろしくな！」

今回はそれを華麗にスルーして、近くに居た女の人を預けてどっかに行ってしまった。

「え？ちょ、ちょっと!？」

声をかけた時にはもう当麻の姿は見えなかった。

・・・とりあえず。

「何か困ってるんですか？」

本当は僕達は非番だったんだけど……。ま、仕方ないかな。

「ああ、車を探してるんだ」

「車の特徴はなんなの？」

「どこにでもある、青い車だ」

「駐車場の特徴はなんだ？」

「ふむ。・・・横断歩道があったな」

「こいつ、あほだろ」

「鈴、それは言っちゃいけないよ」

「おまえら酷いこと言ってるからな」

大丈夫、自覚は少しあるから。

「ふう、暑いな」

「そりゃ夏に近づいてますから、って何やってんだあ！？」

「暑いから服を脱いでいるのだから？」

「脱がないでよ！」

しかしと反論してくるが、人だかりが出来ないうちにと僕達は冷房の効いているファミレスに慌てて駆け込むのだった。

~~~~~

「つ、疲れる・・・」

「なんなのあの人、人前で服をいきなり脱ぎだすし・・・」

その本人は今ジュースを買いに行っている。
あれ？御坂さんがなんか考えてる。

「いや、ないない」

・・・いや、意味が分からないんだけど。

「こいつ、どうしたんだ？」

「さあ？」

ゲコゲコゲコゲコ

カエルの声がしたと思ったら御坂さんが携帯で話していた。・・・
携帯の音だったの？（もちろんゲコ太だった。）

しばらく（と言っても一分ないけど）話していた。

「ちょっと変わっているけど普通の人」「変わっているというのは私のことかな」

「うわっ」

ピ

御坂さんはとっさに電話を切っていた。

なんか言い訳してるけど。

御坂さんが話（という名の言い訳）を終えると、

「手伝ってくれる礼だ」

そう言って女の人が缶を渡してくる。

・・・スープカレーだった。しかもホット。

「あ、あはは・・・」

御坂さんは乾いた笑い。

「暖かい時には温かい物を飲むといいのだよ。さらにカレーに含まれているスパイスには疲労回復を促す効果があるんだ」

うん、確かにもっとも。でもさ、気分的には冷たい物がいいんだよね。

「いや、理屈は分かる気はしますが気分的には冷たい物がいいかなあ、なんて」

御坂さんが言う。

「気分か・・・。若い人たちはそういう選択をするものだったな。すまない、買いなおそう」

「いえ、いいです。お気持ちだけで」

「そうですよ」

「筋トレしたあとによさそうだな」

「・・・」

鈴だけは無言だった。

がんばってホットカレーを飲もうとしながら御坂さんが聞く。

「すまないね。研究ばかりしているせいか理論的に考える癖が付いてしまうのだよ」

研究？

「研究って・・・学者さんなんですか？」

今気が付いたけど御坂さんが敬語使ってる。

「大脳生理学、主にA I M拡散力場の研究をしているんだ」

スープカレーを飲みながら女の人答える。

「それって能力者が無自覚に周囲に発生させる微弱な力のことですよね」

「ああ、もう授業で習ったかい」

「ええ、一年の時に「うおお知恵熱があああ」」

「大丈夫かい？」

真人がうめき声を上げたので女の人心配してる・・・のかな？

「真人、帰ったら？」

「すまねえな、理樹。いつかこの筋肉で返してやるからな」

「いや、いらないから」

真人は帰っていった。

あ、御坂さんが一気飲みしてる。

「りき」

「ん？なに？」

「いらんからやる」

そう言われてスープカレー（ホット）のジュースを渡される。

「いやいやいや」

結局受け取ることに。

とりあえず飲まなきゃいけないんだけど。・・・がんばって飲み終えたよ。

御坂さんたちはまだしゃべってる。

「ええと、……どんな能力でも効かない能力……なんてあるんじゃないか」

それって当麻のことだよな。

「能力といってもたくさんあるからな。例えばどんな能力が効かないんだ？」

「ほぼ全部」

ついそう言ってしまった。

「は？」

「ですから、ほぼ全ての能力が効かないんです」

「そんな能力は聞いたことがないが……。まあ、「ベチャ」む？」

子供が転んで女の人にアイスクリームをくっつけていた。

「うわあ」

「かわいそうだ」

「ご、ごめんなさい」

「なに、大丈夫だすぐに脱げば……」

「「ぬいじゃだめ!!!」あと、あんたは見んなあ!!!!!!」

「ちょ、見てな（バチバチイ！！）うわあああ！！！！？？？（バキイ！！！！）へぶっ！！！！」

その後しばらく電撃と光の速度による蹴りで強制的に気絶させられた。

「色々ありがとう、じゃあ」

目覚めた時には木山さんは車を発進させていた。

気付いた時には・・・終わってる。

じゃない。もちつけ、いや、落ち着け、僕。なんでくろ○ぎの真似なんてしなきゃいけないんだ。

しかももちつけて・・・・。まあいいや。

状況を整理しよう。

気絶させられる＞着替えを（多分）した＞僕は目覚めない＞車探し再開＞車発見＞僕目覚める

よし、OK。・・・じゃない！なんで僕気絶させられたの！？あ、見たと思ったからか。

「ん？起きたか」

「起きたけど・・・」

「じゃ、自分で歩け」

と、言われた後、体が倒れる。そこまできてふっと気付く。
僕の考えに足りないものがある、と。それを考えてみよう。

気絶させられる＞着替えを（多分）した＞僕は目覚めない＞引きずって移動＞車探し再開＞車発見＞僕目覚める＞目覚めたことに気付く＞現在に至る。

周りから見たら・・・僕が変態みたいじゃ「ぎゃあああ!!」・・・ん？

考え事をしながら歩いていると、聞きなれた声が耳に響く。

「全滅だ・・・。重要なタンパク源が・・・。せつかく二時間も並んだのに・・・」

・・・僕が不幸にあった原因の人がそこに居た。
かみじょうとうま

でも、なぜか不幸に遭わされた僕が可哀想になる雰囲気になっているのは。

「どうしたんだ、こいつ」

「さあ」

僕と鈴の声で気付いたのか、当麻がこちらをむく。

「「あ」」

・・・当麻と御坂さんの視線が交差した。

~~~~~

現在、僕達（当麻を含む）は、川原にいた。

・・・いつだったか僕と御坂さんが戦った場所だ。  
何故ここにいるのか……。簡潔に説明しよう。

視線交差＞口論＞「じゃあ、本気でやってやるよ」

「で、現在に至ると」

「何を言ってるんだ？」

鈴に聞かれていた！ 恥ずかしい……。

「ずっとこの時を待ってたんだから！！」

「うおっ！」

あ、決闘が始まった。しかも電撃飛ばすの早い！ それを防げる当麻も十分すごいけど。

電撃が効かないのを確認した後、攻撃方法を変えたね。

砂鉄の剣に。・・・ちよつと血が出るとか言ってるけど、絶対それじゃ済まない。

・・・殺傷力だけなら僕のほうが高いけどね！

当麻が砂鉄の剣を消し飛ばした……。ただの砂鉄に戻した、と言ったほうが正しいけど。

しかし流石御坂さん。学園都市4番目の演算能力は伊達じゃない（まあなんで右手しか使っていないことに気付かないのか謎だけど）

空気中の砂鉄操り、そこに注意を引きつけた。

「こんなの、何回やっても同じじゃねえか!!」

当麻はそう言いながら、自らに襲い掛かる砂鉄の塊を消し飛ばした。そこへ御坂さんが、右手、を掴んだ。きっと直接電撃を流そう、とか思ってるんだと思う。

・・・だけど、右手を掴んだ御坂さんは、電撃を流すどころが、能力も使えなくなっている。

この勝負、どうなるか予想できる。

当麻が左手を上げる。御坂さんが怯える。

・・・来ヶ谷さんがいなくて良かった。

『ああ、可愛い・・・』

バツ

なんとなく嫌な予感がして振り向く。

・・・誰もいない、よね。

「どうしたんだ？理樹」

「いや、なんでもないよ」

「そうか？」

（そのころの来ヶ谷）

「今、なにかおいしい事を見逃した気が・・・」

「どうしたの？ゆいちゃん」

「だからゆいちゃんと呼ぶのはやめろと」

---

うん、気のせいだ。

当麻はびびってる（本人に言ったら否定されそうだけど）御坂さんに手を出せず、電撃をくらった振りして倒れる。はあ、この後はきつと・・・。

「ふざけんなああ!!!!!!」（バチバチバチイ）

・・・やっぱり。

「あほだな」

同感。

僕たちはその場を去った。

その後、当麻限定のリアル鬼ごっこが始まった、ということとは記す

までもない。

白井さんに御坂さんが襲われることも、僕は知らない。

脱ぎ女ともいえるが、決闘ともいえる（後書き）

ド「いやあ、やっと出来ました4」

理「お疲れ様ですね」

ド「しかも、このSSのネタは思いつかないというのに……」

理「いうのに？」

ド「ほかのネタが思いつくというのは悲しかったです4」

理「そうですか。」

ていうかなんなんですかそのしゃべり方」

ド「あ、これ？そのまま喋ってると理樹と見分け、というか聞き分けつかなくなるじゃん」

理「あ、そうですか。……さて次回は」

ド「鼻から牛乳」

理「違うよ！次回、番外編、バトルスタート！お楽しみに」

ド「楽しんで言ってるトコ悪いけど、その間になんか入るかも」

理「えええ………」

## PV12000突破につき 外伝 何故その能力を選んだか

ふと、疑問に思った。どうしてみんなは風とか火を操ったりする能力をえらんだか。

恭介の場合

「虚構世界を参考にしたんだ。永遠の一瞬。世界を作ることが無理でも時間を操れたらカッコいいだろ？」（恭介らしいや）

鈴の場合

「んーきょーすけがこんな能力だったらカッコいいっていったから」（鈴ならありえそうだ）

真人の場合

「いいか、筋肉っていうのは（筋肉について関係のない話が続くため中略）というわけで、まとめると筋肉ってのは怪我をすればするほど鍛えられる。早く回復すればするほどな。だからだ」（想像はしてたけど、当たってるとは思わなかったよ）

謙吾の場合

「ああ、俺は武道を習っていただろう？だから武器があれば勝負には大抵勝てる。だがいつも持つてるとは限らない。だから武器を簡単に作りだせるこの能力を選んだんだ。ところでこのジャンP（ジャンパーの話が続くので省略）」（謙吾は馬鹿になってしまった、ということのを再認識した）

西園さんの場合

「三枝さんに「みおチンのツツコミは氷のごとく冷たいのですヨ」と言われたので」（葉留佳さんの真似はすごく上手だった）



美鳥の場合

「私は選んだんじゃないよ？そういう存在だからそうだったんで」（なんとなく納得）

葉留佳さんの場合

「暖かいのが好きだから。氷でもよかったんだけど、みおチンに譲ることにしたのですヨ」（楽しそうに話しているけど、なんとなく暗い感じがした）

佳奈多さんの場合

「私？……家の事情、知ってるでしょ？そういう目になりそうだったらそういう目にしてやろうって思ったのよ」（そう話す佳奈多さんは少し怖かった）

来ヶ谷さんの場合

「わたしか？…楽しめなくなるので秘密だ」（最後まで教えてもらえなかった）

クドの場合

「物事には流れというものがあるのです。風はその代表みたいなものなのです。というわけで、私はエアロマスターになったのです」（結局意味が分からなかった）

小毬さんの場合

「ふえ、私？ほら、私ってお昼寝しちゃう時があるでしょ？遅刻しないようにしてもらったんだ」（ありえそうだ）

古式さんの場合

「私は選んだものではありません。気付いたらここに居た、それだけ

です」(クールに言っていて、何を考えてるかよく分からなかった)

綾の場合

「あたし?…そうよ、どういうわけか痛みが気持ちよくなって選んじやったわよ。神様にも同情されちゃって土を操る能力を貰っちゃったわ!最初憎むような存在に同情されっちゃったなんて、滑稽ね、滑稽でしょ?笑っちゃいなさいよ!あゝはははって!!あゝはっは!!」(綾の自虐はすさまじかったよ。苦笑いで殴られたし)

転生者の四人

「「「名前で勝手に決められた!!」」」(転生させたのは男の神様らしい)

いや、いろんな理由で決めた人がいるなあ。

…え?笹瀬川さん?考えてたら時間がないからって適当に決められたらしいよ?

終われ

**PV12000突破につき 外伝 何故その能力を選んだか（後書き）**

ド「よし、終わったぜ」

理「お疲れ様」

ド「綾の自虐は無理矢理です。すみません」

理「まあ確かにすぐ強引だったけど」

ド「ところで理樹、気付いたかね？」

理「なにが？」

ド「能力設定で涙の能力が少々変わっているのだよ」

理「嘘！？あ、ほんとだ。ナンデデスカ？」

ド「そこ、片言になるでない。考えてもみろ。」

能力使うから髪よこせ、なんて言ったら変体じゃない、変態じゃない」

理「なるほど」

ド「さらに能力も強化されている」

理「まあこれくらいはあったほうがいいんでしょうが」

ド「では次回こそ？」

理「番外編、バトルスタート！お楽しみに」

ド「アドバイスなどもドシドシ来て下さい」

## バトルスタート

これは、本来の物語とは関係のない、リトルバスターズの日常である。

「理樹！勝負だ！」

真人の発言

その言葉を合図にたくさんの武器（？）を投げ入れてくる野次馬。科学の世界でそんなこと、と思うかもしれないが、事実である。

（バトルは第三者の視点が基本です）

スチャツ

僕と真人は同時に武器を手取る。

僕は……ヨヨーだ。（科学によって4〜6回攻撃するとエネルギーが溜まり、電撃が放てる）

真人は……うなぎパイ（袋付き）。

あれ、デジャヴユ？

（新、バトルのルール

- 1 投げ入れられた武器ならなんでも使用可
- 2 能力の使用は一回だけ、それも攻撃には使用してはならない。これを破ると強制的に敗北
- 3 3つ上までしか挑めない
- 4 それ以外は前と同じ）今のところこれだけ（by作者

男の娘

直枝理樹

VS

筋肉を取ったら存在が無い

井ノ原真人

「何この称号!？」

「筋肉がある、ということは嬉しいんだが・・・」

バトルスタート!

「行くよっ」

理樹の攻撃! ヨーヨーを真人に向かって振り回した!

真人に85のダメージ!

真人に78のダメージ!

「今度はこっちから行くぞ!」

真人の攻撃! うなぎパイを理樹に叩きつけた!

理樹に65のダメージ!

理樹に71のダメージ!

うなぎパイにヒビが入った!

「負けないよ!」

理樹の攻撃! ヨーヨーを真人に向かって振り回した!

真人に75のダメージ!

真人に77のダメージ!

エネルギーが充電された!

「使え」

真人はカツカレー弁当を食べた!

HPが90回復した!

真人の攻撃！うなぎパイを理樹に叩きつけた！

理樹に73のダメージ！

うなぎパイが粉々になった！

「ああああー！！！！！！うなぎパイがあああああああ！！！！！！」

「早めに終わらせるよ！」

理樹の攻撃！ヨーヨーに充電された電撃を真人に解き放った！

クリティカルヒット！真人に250のダメージ！

「まだだ！！」

真人は能力、‘肉体再生’を使用した！

HPが200回復した！

真人は粉々になったうなぎパイを振り回した！

理樹に5のダメージ！

理樹に7のダメージ！

「早く倒れてよ！」

理樹の攻撃！ヨーヨーを真人に向かって振り回した！

真人に74のダメージ！

真人に76のダメージ！

理樹は振り回す、のコツをつかんだ！

「この武器、なかなかいいね」

「うおらあ！」

真人の攻撃！粉々になったうなぎパイを理樹に向かって振り回し始

めた！

袋が破けて粉々になったうなぎパイが理樹に降り注いだ！

理樹に35のダメージ！

理樹に42のダメージ！

理樹に38のダメージ！

理樹に37のダメージ！

武器が袋しなくなっちゃった！

「うおおおおお!!! これじゃあ戦えねえじゃねえかあー」

「行くよ！」

理樹の攻撃！真人に向かってヨーヨーを振り回した！

真人に76のダメージ！

真人に79のダメージ！

真人に78のダメージ！

「ぐおおおおお……」

真人は倒れた……。

「この称号をあたえよう」

真人は「体は大人、頭脳は子供」の称号をあたえられた！

「うおおおおお！……！！！！！！！！」





「つていう夢を見たんだけど」

「へえ、面白そうだな、それ採用」

「……………え？」

なんて会話があったということは本編には関係ない。  
さらに称号がこの夢と同じになった事も、関係はない。

## バトルスタート（後書き）

「ところでさ」

「なにかな？」

「名前なくなってるんだけど。ていうか口調は？」

「両方面倒になった」

「ええええええええええ………」

「さて次回は虚空爆破事件とかそんなタイトルだった気がする（前編）だ。多分」

「なんでいきなり次回予告してんの！？ていうか多分って何！？」

「気にしちゃだめだぜ」

「もういいです」

## 虚空爆破事件とかそんなタイトルだった気がする（前編？）

さて、この現状をどうしたらいいんだろう。

目の前にあるのは一メートルはあるだろうと思われる書類。それが五つくらい並んでいる。

僕だけじゃなく鈴と恭介ロリコンも驚いている。

「理樹、今失礼なこと考えてなかったか？」

「別になんでもないよ。ところで白井さん？なんでこんなに書類があるのかな？」

「あなたのですわよ？結構溜まりますのよ」

「あきらかにおかしいと思うぞ」

「この量はねえよ。どんだけ溜まってんだよ」

そして白井さんには10cmくらいの書類。

「……………帰っていい？」

「だめに決まっていますの」

「いやいやいやこの量を終わらせろっていうの！？ていうか昨日一昨日の分をまとめてやったけどここまで多くは無かったよ！？絶対自分の分混ぜてるでしょ！」

「もうくちゃくちゃだな」

はあ。……………ん？

上から紙が落ちてきた。

「なにこれ」

「それは最近起こっている虚空爆破の資料ですの」

「グラフィック虚空爆破事件？」

「ええ。ただてきと……………あわてていたのでどの辺りにあるのかさっぱりで」

「今適當って言おうとしたよね……………」

まあちよつと最近気になっていた事件だ。  
少しやる気が出てきた。

「恭介、あと渥無さんと溺さん、そこにいるでしょ。とつとと終わらせるから手伝って」

「まじか？」

「……………よく気付いたわね。流石リーダー」

「俺まで見破られるとは思わなかったんだがな」

いやまあ消去法だったんだけど。

「ところで神さんと涙さんは？」

「見回りだ。にしてもこの量……時間がかかりそうだが、まあg……四人なら早く終わるだろうな。さっさとやっちまおうぜ」

「そういうこと。とっとと終わらせるよ。鈴は自分の宿題終わらせてなよ。分かんなくて困ってたでしょ？」

「うみゅ。こまりちゃんがいれば楽なんだが。みまわりとかいってたし、困らせるわけにもいかないしな」

よしよし、ちょっとは自分で考えて行動できるようになったかな。  
……………あれ？

「溺さん。今なんで詰まったんですか？」

「それは、ちょっとな」

そういいながらちらっと壁を見る。

僕もその方向を見る。何も無い。壁だけだ。

どうせなので試してみよう。僕はちょっと『特殊な演算』をした。壁の近くに、というか上から金ダライが落ちる。

しかし途中で半分になった。

「……………やはり溺少年にはお仕置きが必要なようだな」

「悪かったって！けどつい言っちゃった事くらい勘弁してくれてもいいじゃないか!？」

もういいから、とっとと書類を終わらせたい。ああ、頭が痛くなってくる。

ぱぱっと真っ二つになっている金ダライを空気に戻す。  
幸い白井さんにはばれなかったみたいだ。

「いいからとっとと仕事しようよ」

結局書類は僕と恭介の二人でやったのだった。  
え？ 渥無さん？ 溺さんと一緒に来ヶ谷さんに暴言はいてたけど？

「うーん。風紀委員の犠牲者が多いかな。」

書類仕事が終わってから数十分。  
おおまかな資料に目を通した僕はこう呟いた。

「どういふことですか？」

「風紀委員が9人負傷してる。いくら一般人を守ったからって多すぎる」

「ああ。それに比べて一般人の犠牲者が殆どいないこれは「風紀委員を狙った犯行という可能性が高いって訳、でしょ？」 そうだが俺の台詞をとるんじゃないかねえ」

「ということは」

といったところで

「重力子の加速を確認！ 場所はセブンスミスト！」

そう、声が響いた。



虚空爆破とかそんなタイトルだった気がする（後編？）

セブンスミスト。その場所はデパートで、一般人がたくさんいる。

「冗談じゃない、そんなところで爆発したらどれだけの死傷者がでるか分からない」

「だからこそ早く対処しねーとやばいな。白井は初春に連絡、俺と来ヶ谷はメンバーに一斉送信するから溺と理樹、セブンスミストに急ぐんだ！鈴と渥無は俺のバンを貸してやる！多分犯人は近くで様子を見るはずだ！怪しいやつを尾行して手錠をはめろ！ミツシヨンスタート！」

恭介が一斉に指示を出す。しかも言いながらもメールを打っている。来ヶ谷さんも。

白井さんは初春さんと連絡が付いたようだ。

なら僕もやる事をやるだけだ。

「溺さん！」

「おう！」

セブンスミストの方向の窓を開けると枠にのる。溺さんが能力を使い、水を集める。

「いいぞ、理樹！」

「うん！」



軽くジャンプする。するとそこに圧縮された水が放たれる。水鉄砲の要領で勢いよく飛び出す。

ただ一つ問題がある。それはスカートだと相当うまくバランスをとらない限り下着が見えてしまうため、女子には使えないという問題だ。

まあ鈴は光の速度で走る事も可能だけど、急いでる今回使わなかったのには勿論理由がある。

セブンスミストまではそれなりの距離がある。その距離を光の速度で走ると衝撃波で周りの建物は倒壊、人の体はグチャグチャになるという大惨事になる。

だから無闇に使ったりしない。

今のところ100mぐらいなら周りに大きな被害は出ない事が分かっている。

鈴がこの前強盗を蹴っても周りに大きな被害が出なかったのはこれが理由だ。

とか考えているうちに似たような方法で飛び出し、こっちに追いつき腕を掴んで更に噴射させる溺さん。

「見えてきたね」

「さて、この辺りで降りるぞ」

そういい、路地裏に降りる。そして、走る。

セブンスミストの中に入り、初春さんを探す。

さっき内容をしっかり伝えるまえに切られてしまったかららしい…

……………居た。

いたけどそこに女の子がやってきた。

「はい、これ眼鏡のおにーちゃんが風紀委員の人になって」

その子が初春に人形を渡そうとした瞬間歪み始めた。  
そして初春はそれを掴み、投げた。

「やばくない!?!」

「やばい! 初春!!」

溺さんが呼びかけるとこっちに気付いたようでこういった。

「逃げてください! あれが爆弾です!!」

すぐに駆け寄る。ツンデレビリビリ御坂さんが超電磁砲レールガンを放とうとするけどコインを落として失敗した!

「しまっ!!」

というところで上条と僕が間に合った。

「当麻!」

「おう!!」

当麻が右手を出して炎を防ぎ、僕が熱風と、消しもらした炎を殺す。  
ちなみに溺さんボケだけは寸前でこけて爆発寸前で自分の周囲に液体窒素並みの温度の水を展開させて防いだ。

「「なんか変な事言われた気が」」

僕は何も言っていないし、思ってもない。

「さて、犯人をつかまえに行きましょう」

「残念ながらその必要はないよ」

携帯で内部状況を細かく書いたメールを鈴に送る。

あとは鈴と渥無さんが解決してくれるはずだ。

そのあと、逮捕したという鈴のメールのあと、僕達は帰路についた。

そういえば、渥無さんがすごい笑ってたのが気になるし、鈴がすこし怖がってたのがとても気になる。

何かあったのかなあ。

虚空爆破とかそんなタイトルだった気がする（後編？）（後書き）

「やっと終わった……」

「けっこう時間かった割には短いね」

「……………麦野とくっつけっぞ?」

「ごめんなさい」

「よろしい」

「でもすごい嫌な予感がするけど」

「理」~~~~~「樹」

!!!!!!

「うわ!!!」

「だれがビリビリツンデレかあああああああああああああ  
!!!!!!!!!!!!!!」

「だれが存在がボケかあああああ……！」  
「言っていないよおおおおお……！」

「言っ  
てないよお  
おおお  
おおお  
おおお  
おおお  
おおお  
……！！！！！！！！！」

（泣）

⌋!!!!!!!!

「さて、次回はアンケートでも出そうかと思っておる。次回を待っててくれ」

## アンケート、だど？みたいな

ここでアンケートを読みそこないがないように発表しようと思います。

アンケートの内容はリトバス男子のカップリング、及び女子を誰とくっつけるかということ。

表示の仕方はたとえば 名前×名前 という感じで。出来れば一人はとあるのキャラとくっつけたいです。御坂と上条のカップリングは譲りませんので。

そしてもう一つは、敵になる転生者を出そうと思っているんですが、そのキャラの名前と能力をよろしく。

ちなみに強い能力を希望したいです。ただし、詳しくお願いします。違う作品の能力やオリジナルの能力の場合、名前だけでは分からない場合がありますので。

名前は面白いやつを希望します。

ただ敵オリキャラのほうは思いつかなければ別に考えなくとも大丈夫です。

その場合は未元物質さんになりますから。まあ未元物質さんの口調がよく分からないので、あれ？となるかもしれませんが。

ちなみに、両方ともいつそこまで書けるか分からないのでゆっくり考えてください。

このアンケートは、出来れば、というもののなので、思いついたやつを適当にやるだけでかまいません。待ってます。

## アンケート、だと？みたいな（後書き）

「ちょっとアンケート」

「なんで強い能力なのさ」

「もちろん経験値アップ」

「……………誰が？」

「……………」

「……………？」

「……………禁則事項です（笑）」

「はいはい」

「スルー、だと？」

「もういいから」

「しょうがない、次回は、虚空爆破事件とかいうタイトルだった気がする（裏編？）です。」

「次回を待っててください」



**虚空爆破事件とかそんなタイトルだった気がする（裏編？）**

鈴 視点

きょーすけが車のキーを投げてよこす。

そのままあくむと駆け出して、車に乗り込む。

「人使いが荒い元リーダーロリコンね」

「そーだな」

あたしも運転免許はとったが自分でいけばいいと思う。  
けっこうギリギリで走らせる。なかなか気持ちいい。

「♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪」

「ノリノリね」

「最近かつやくとゆーやつをしてないんだ。いつもおいしいところ  
を持っていかれてるらしい」

「恭介に聞いたんでしょ？」

「そーだが？」

そんなふうに話しながらえつと……………ヘヴンスミストだったか？  
つてところの近くに到着だ。

「話ながらでもかなり上手ね」

ちょっと恥ずかしい。

人気のないところに移動してジャンプ!!  
ビルの上に立ってあやしいやつを観察する。

「あれか？」

「あれね」

下からは、風紀委員を…とかまとめて…とか言ってるし多分間違いないと思う。

「で、どうするんだ？」

「なにも考えてないの？」

「そうだがなにか」

どうしてあくむはそこで溜息をつくんだ？

「じゃあ見てなさい」

そーいうとあくむは手をあやしい奴に向けて、銃を撃つような感じでパンツとやった

訳分からんがなんか発狂し始めた……こわっ。

「何やったんだ？」

「幻覚見せただけよ？ちょっとイライラしてたからとびつきり最悪なのをね。フフフフフフ」

こわっ、こいつこわっ！理樹、あくむがこわいぞなんとかしてくれ  
…………。

### 爆弾魔視点

この力をもっと使いこなせるようになれば…………あの無能な風紀委員共をまとめて吹っ飛ばせる！！！！

「……………ん」

ん？何か聞こえたような気がする。

グチャ…………ビチャ…………

「……………て……………の」

なにかが喋ってる？

後ろから？

振り向いた。いや、振り向いてしまった。

そこにいたのは……………僕が人形を渡した少女だった。

「どうして…………殺したの？……………ねえ、どうして？」

少女はズルズルとこちらに這ってくる。

「あ……………ああ……………ああ……………ああ……………！！！！」

「どうして？ねえ……………どうしてドウシテドウしてどうシテどうして……………」

「ひい、あ、うう、うわあああああああああああ！！！！！！！！！！」

走った。周りのことを気にするような暇もなく、ただ走った。  
でも

「マッテヨ」

どれだけ走っても

「マッテヨ……オニイチャン」

走り続けても

「ネエ……マッテヨ、オニイチャン」

の 声 は 聞 こ え 続 け た

少女

ガシ

何かが僕の足を掴んだ。      足音を見てあったのは……………。

少女だったものの手と肉の欠片が血まみれになって散乱していた。

ズチュ……グチュ……グチャ……

そのまま地面に引きずり込まれていく。

「コツチニオイデヨ。………オニイチャン。オイデヨオイデヨオイデヨオイデヨオイデヨオイデヨ………」

「うわああああああああああああああああああああああああああああああ………」

後日、ほとんど意識のない少年が路地裏で発見されたという。

虚空爆破事件とかそんなタイトルだった気がする（裏編？）（後書き）

「アンケートがあまり来ない」

「いや、そもそも読んでくれてる人がいるかどうかまあやしいけど」  
「読んでくれてる人はいるさ。アンケートが来ないだけ」

「というかアンケート出しすぎなんじゃ？」

「ここでもう一つアンケート出したかったんだけど……」

「……………出せばいいと思うけど？」

「じゃあ出す。直枝理樹の決め台詞をだれか！」

「決め台詞？」

「ほらあるじゃん。俺の未元物質に常識は通用しねえ、とか」

「こっからは一方通行だ！とかその幻想をぶち殺す！とか？」

「そう。考えてはみたけどどうしても直枝理樹の性格に合わなくてさ」

「まさかの問題発言」

「しょうがないじゃん、思いつきのSSなんだから」

「「というわけで誰か救いの手を！」」

「他のアンケートも待ってます」

「次回、」

「投稿遅れそうです。題名不明です」

「ええええええええええええ……………」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7355p/>

---

とある世界でリトルバスターズ

2011年11月13日08時09分発行